

とやまと自然

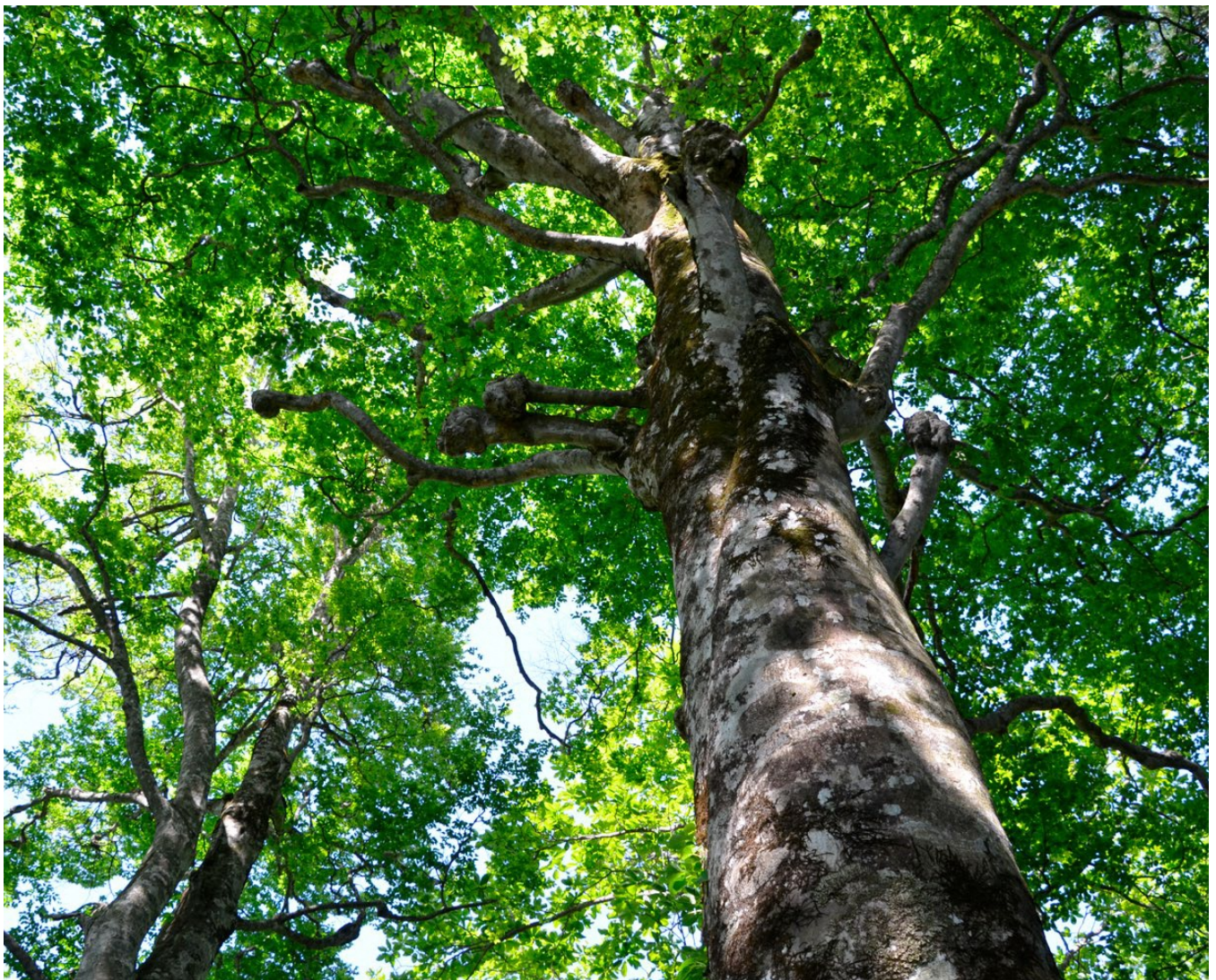
第47巻 冬の号

No.187 2025

立山美女平・ブナ坂の自然観察

太田道人・岩田^{ともふみ}朋文・高畑^{ばたけあきら}晃

富山市科学博物館



■ ブナの大木 広いブナ林の地中から樹上^{じゅうじょう}までの間には、多様な生物が息づいています。美女平 5月下旬。

カラー版^{ばん}をホームページ^{げいまい}に掲載しています。

立山美女平・ブナ坂の自然観察

太田道人・岩田朋文・高畑 晃

1. はじめに

標高約 1000m の立山美女平は、立山駅からケーブルカーで約 7 分の場所にあります。美女平駅前からは、タテヤマスギの針葉樹の森とブナやミズナラなどの広葉樹の森が広がっています。

美女平からブナ坂の間には、探鳥コースの名がついた遊歩道が整備されており、野鳥の鳴き声を聞きながら、春は植物の花、夏は森林浴、秋は紅葉を楽しむことができます。

・植物

春、森の地上には、イワウチワやユキザサ、ムラサキヤシオ (図 1)、サンカヨウ (図 2) の花が咲き、一年で最も賑やかな花の季節を迎えます。

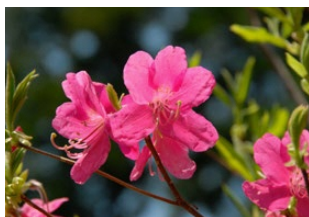


図1 ムラサキヤシオ



図2 サンカヨウ



図3 タテヤマスギの大木

天然のタテヤマスギの大木 (図 3) は、火災のような枝ぶりが特徴で、森の中には根元に人が通れるほどの穴が空いているものや幹に大きな傷があるものもあります。タテヤマスギの巨木には、人と自然の関わりの歴史が秘められています。

標高約 1,100m のブナ坂には、ブナが多く生育しています。新緑の美しさや多雪地特有の根元が大きく曲がった木、毎年実るとは限らないブナやミズナラの生態と動物との関係など、ブナ林には話題が尽きません。

・昆虫

美女平には、巨木の森ならではの昆虫がすんでいます。オオチャイロハナムグリの幼虫は、巨木の幹に空いた穴 (樹洞) の底にたまった木くずを食べます。また、巨木が枯れると菌に分解され、朽ち木を食べる昆虫やキノコを食べる昆虫をはぐくみます。林床に生えるカンアオイ類は、ギフチョウ (図 4) の幼虫の大切な食べ物です。

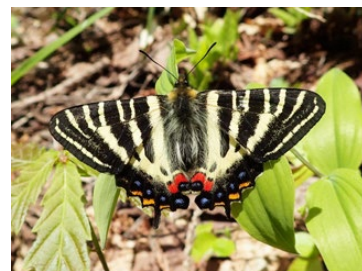


図4 ギフチョウ

・野鳥

美女平・ブナ坂は富山を代表する探鳥地です。特に、ブナの木が芽吹き始めた春から初夏の頃は鳥たちのコーラスがにぎやかになり、鳥を観察するには最もよい季節です。キビタキやコルリをはじめ、サンショウクイ (図 5)、クロジ (図 6) などを観察することができます。

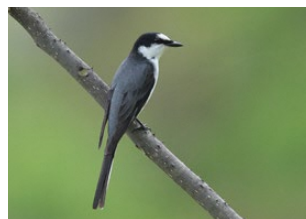


図5 サンショウクイ



図6 クロジ

次のページからは、植物、昆虫、野鳥、それぞれの観察の話題を 1 ページずつにまとめて紹介します。

森は何十年、何百年かけてゆっくりと変化していくものですが、立山美女平・ブナ坂でも、この 30 年程の間に多くのブナが衰退したり、観察できる鳥の数が減ったりするなど、ちょっと早過ぎるのではないかとと思われる変化が出ています。これには、わたしたち人間の活動が生きものたちの生育・生息に様々な影響を及ぼしている可能性があります。詳しい調査や地球規模の環境保全が求められています。

タテヤマスギの「あがりこ」

雪深い森で材木を育てたなごり

太田道人

立山の美女平とその周辺の山には、竹ぼうきを逆さまに立てたような形のスギの巨木（図1）がたくさんあります。地面から5mほどの高さまで、太い幹がどっしりと立ち、その上から細めでまっすぐな幹が何本も伸びています。このような樹形を「あがりこ」と呼びます。

これは、昔の人がまっすぐな木材を得るために、木の再生力をうまく生かして使い続けてきたものです。上の幹を伐採する時期は、雪が2～3m積もっている冬で、5mの高さから雪の上に幹を切り落とし、2m程に切りそろえてソリに載せて運び出していたようです。

あがりこは東北地方に多く、ブナやハルニレ、トチノキなどでも作られています。枝分かれ部分の高さは、普通、地上から2～3mのことが多いですが、美女平では約5mと高いのが特徴です。その理由は、約3mの雪が積もる美女平では、これより低い位置の枝は積雪に引っ張られて下向きになってしまうのに対し、高さ5m以上の位置にある枝は雪で下に引っ張られることなく上向きに育つことができるので、この高さに仕立てられてきたのだと考えられます（図2）。



図1 あがりこ樹形のタテヤマスギ。愛称「天涯杉」

図2 「あがりこ」ができるまで

<p>①</p>	<p>②</p>	<p>③</p>	<p>④</p>
<p>若い木を高さ約5mの位置で伐採する。この時、横枝を数本残しておく。</p>	<p>5mの位置にある横枝は、冬3m積もる雪に埋もれることなく、上向きに生長する。</p>	<p>数十年後、枝が適当な太さの幹に育ったら、少し高い位置で切り取る。</p>	<p>残された幹からまた新しい枝が何本も出て、数十年後には、さらに枝や幹の多い「あがりこ」になる。土台の幹も太くなっている。</p>

とおぬ 根元を通り抜けられるタテヤマスギ

そこには昔、一本の倒木があった

太田道人

立山の美女平には、背をかがめれば通り抜けられるほどの穴が根元にあいたスギが何本もあります。この穴は、何百年にも渡って繰り返されているスギの枯死と再生の歴史を物語っています(図1)。

スギの芽生えは光不足に弱いため、他の草に覆われてしまう地面では育つことができません。しかし、そこにたまたま倒れた大木があって、運良くその上で芽生えたスギは草の陰にならずに生き残り、生長を続けることができます(図2-①)。

芽生えは、倒木の幹をまたぐように少しずつ根を伸ばしていき、やがて地面に根を張って自立します(②)。そこからさらに何百年もかけて大木に育っていきます(③)。

土台となっていた倒木のスギは、500年ほどもたつとさすがに朽ちて徐々に消えていき、ついには根元に穴のある大木だけが残るのです(④)。



図1 根元に大きな穴があいているタテヤマスギ

この状態はこの先何百年かは続きますが、この大木もいつかは地面に横たわり、その幹の上で次の世代を育てていくことになるでしょう。



スギの芽生え

図2 空洞のある木ができるまで

<p>①</p>	<p>②</p>	<p>③</p>	<p>④</p>
<p>生長に光を必要とするスギの芽生えは、倒れた大木の上や切株の上など、草に覆われることのない、高い場所で育ちます。</p>	<p>芽生えの根は、倒木をまたぐように伸び、やがて土に根を張って自立します。</p>	<p>200～400年ほどかけて、大木に生長します。</p>	<p>土台となっていた倒木が朽ち果て、根元に穴のある大木が残ります。</p>

巨木の樹洞にすむオオチャイロハナムグリ

岩田 朋文

オオチャイロハナムグリは、体長 2.6 ~ 3.6 cm ほどの比較的大きなコガネムシの一種です。全身が赤黒く、鈍い金属光沢があり、いぶし銀のような渋い魅力をもつ昆虫です(図1)。日本国内では本州、四国、九州にすんでいます。大型で分布域も広いことから、比較的に見つけやすいように思うところですが、人里離れた深い森にすんでいるため、実際にはなかなか観察できない珍しい昆虫です。

オオチャイロハナムグリは、巨木の樹洞でくらしています(図2)。幼虫は、樹洞の中にたまった木くず(フレーク)を食べて、おおむね2年間かけて育ちます。成虫は、7~9月に出現します。ちなみに、オス成虫は、桃のような甘い強い匂いを出してメスを呼びます。そのため、近くにオスがいれば匂いで気づくこともあるほどです。

富山県では、県西部から県東部まで山地の森で見られ、その中でも美女平周辺は比較的多くの個体が見られる地域です。これは、ブナやスギなどの巨木がたくさん生えており、天然の樹洞が豊富であることに加え、人間が巨木の幹の一部を切り、はぎとったことも影響しているようです。富山県カルデラ砂防博物館の澤田研太さんいわく、はぎとられた部分は時間が経つと下部に木くずがたまり、樹洞のような環境が生まれ、オオチャイロハナムグリはそのような部分も利用しているようです(図3)。

人間とスギとオオチャイロハナムグリの関わりは、スギの巨木が多い立山山地帯の森林環境を象徴する例のひとつといえそうです。



図1 成虫.



図2 樹洞の脇に出てきた個体.



図3 スギのはぎとり痕を歩く個体.

図2・3は澤田研太氏提供.

ほうせき 春の宝石 トウカイコルリクワガタ

岩田 朋文

クワガタムシといえば、大きくて、黒くて、格好良い、夏の昆虫というイメージが強いと思います。しかし、すべての種がそうではありません。小さくて、青くて、きれいな、春にしか見られない種もあります。ルリクワガタの仲間は、そうした“クワガタらしくないクワガタ”の一つです。

ルリクワガタの仲間は、いずれも体長1～2 cm程度と小さく、クワガタらしい大あごも目立たず、オスの体は青っぽく、成虫は春にだけ出現します。そのため、昆虫愛好家を除くと、実際に見たことがある人は少なく、あまり知られていない昆虫とされます。

富山県には、ルリクワガタ、ユキグニコルリクワガタ、トウカイコルリクワガタの3種がいます。

このうちトウカイコルリクワガタ(図1)は、県西部～県東部(早月川付近まで)の標高1,000m前後の山地にすみ、美女平周辺でもよく見られます。幼虫はブナやミズナラなどの朽ち木を食べて育ちます。成虫は、春にブナなどの新芽に集まり、大あごで新芽を傷つけ、出てきた汁を舐めます(図2)。

春のすがすがしい気候の中、美しいブナの森で、宝石のようなトウカイコルリクワガタを探すのは、とても気持ちがよいです。風の少ない晴れた日を見つけやすいので、興味を持った方は探してみてください。

なお、ルリクワガタ類の分類は研究者によって意見が分かれており、ここでは『日本産コガネムシ上科標準図鑑』(学研)に従いました。オス交尾器の形態、遺伝子、交配実験などの研究が続いており、多くの方が納得できる答えはまだ出ていません。研究のやりがいがありますね!

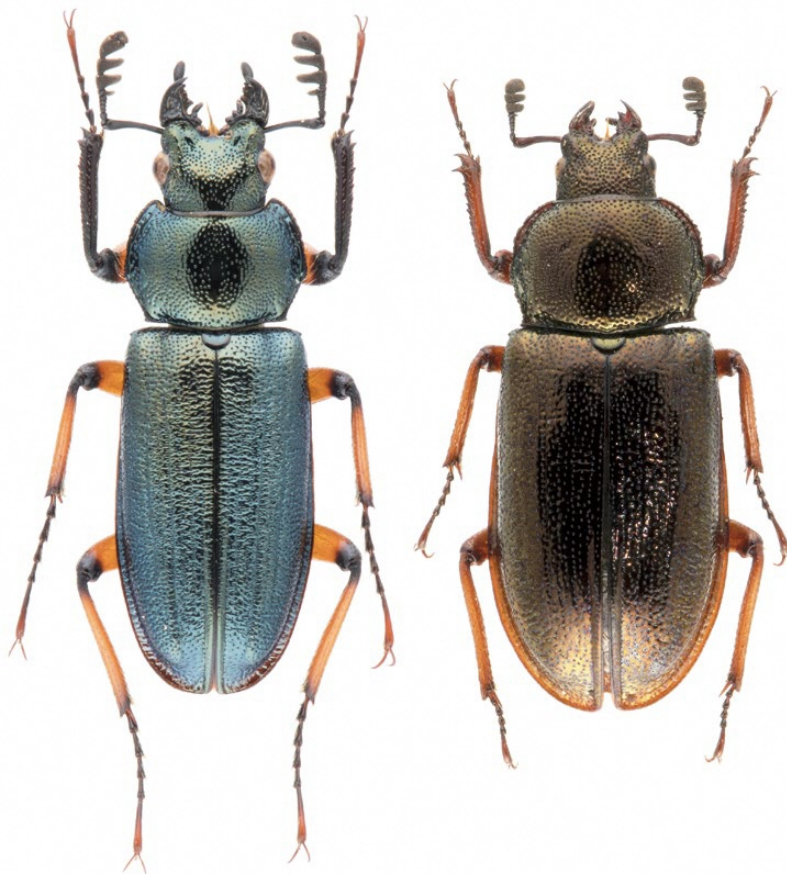


図1 トウカイコルリクワガタ(左:オス、右:メス)。



図2 ブナの新芽に来たトウカイコルリクワガタ。

図は澤田研太氏提供。

森の歌い手 キビタキ

ばたけ あきら
高畑 晃

キビタキの全長は約 14cm とスズメよりやや小さく、オスは頭部から背面にかけて黒く、眉班（目の上の眉のような模様）と腹部、腰が明るい黄色で、喉はオレンジ色をしています。黄色と黒の羽色は若葉の色にとっても映え、新緑の森の代表格です。（図 1）

キビタキの英名は「Narcissus Flycatcher」です。「Narcissus」は水仙という意味です。ギリシア神話に登場するナルキッソスは水辺に写る自分の姿に見とれているうち、水仙になってしまったといわれており、「ナルシスト」という言葉の語源にもなっています。ちなみに、「Flycatcher」はヒタキ類の総称で、飛びながら虫を捕まえる習性を表しています。キビタキは昆虫が主食です。枝から飛び立ち、空中で虫を捕まえては同じ場所に戻るといふ、フライキャッチングを行うのが特徴です。

さえずりも特徴的で、その高く澄んだ響きは楽器のピッコロのように、「ピッポロリーヨ、ピッポロリーヨ」と美しい声で繰り返して鳴きます。他にもさえずり方があって、コジュケイのように「チョットコイ」と鳴くことや、ツクツクボウシのように「オーシツクツク」と鳴くこともあります。

広葉樹の明るい林を好み、オスは林道沿いの横枝や立ち枯れた枝の先など、意外に目立つ場所をソングポストにして、活発にさえずります。



図1 キビタキのオス

オスに対してメスの体色は地味で、オリーブがかった褐色です。（図 2）

ところで、キビタキは「ブン」というハチの羽音のような音を出すことがあります。これは、同じキビタキのオスが自分の縄張りに入って来た時に、相手を縄張りから追い出そうとする行動だと考えられます。互いににらみ合ってから、別のオスに突進する時に「ブン」という音を立てて威嚇するのです。また、「パチ、パチ」と嘴を鳴らすこともあります。さらに戦いが激しい時には、雄同士が空中でぶつかり合うこともあります。（図 3）

ふだんの美しい姿やさえずりからは想像できないような気性の粗さ、そして自然の厳しさを感じる瞬間です。



図2 キビタキのメス

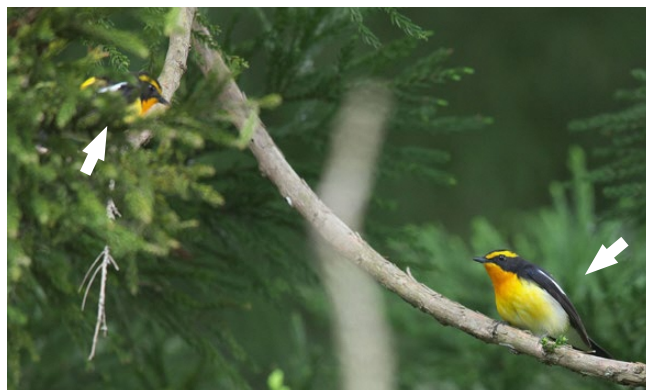


図3 にらみ合う2羽のオス

すがた 声はすれども姿は・・・コルリ

ばたけ あきら
高畑 晃

美女平の遊歩道を歩いていると、ササ藪^{やぶ}や灌木^{かんぼく}が多く生えている辺りから、「チッ、チッ、チッ…」と次第に早くなる前奏^{ぜんそう}の後に、「チージョイジョイジョイ」というさえずりが繰り返^くし聞こえてきます。この声の主はコルリです。

コルリのオスは頭から体の上面^{じょうめん}、尾羽^{おぼね}にかけて暗青色^{むね ばら}、胸や腹などは白色で、全長が14cmほどの鳥です。青と白のツートンカラー^{いろあざ}がくっきりして色鮮やかなので、その姿^{すがた}を見た人は思わず、「かわいい」とつぶやいてしまう鳥です。(図1)



図1 木の上でさえずるコルリのオス

ところが、このコルリ。その姿^{すがた}を見ること^{すがた}がなかなかできず、「声はすれども姿は見え^{すがた}ず」の代表格^{だいひょうかく}とさえ言われるほどです。それは主に地上近く^{ちじょう}で生活しているからです。

姿^{すがた}はなかなか見えませんが、「チッ、チッ、チッ…」という前奏^{ぜんそう}は他の鳥にはないさえずり方なので、この前奏^{ぜんそう}があるかないかで他の鳥と識別^{しきべつ}することができます。しかし、遠いと前奏^{ぜんそう}は聞こえないことがあります。また、最後の「チージョイジョイジョイ」だけ聞くと、コマドリの声と間違え^{まちが}えそうになることもあります。コルリの方はコマドリほど早口ではなく、声量がさほどないことで区別^{くべつ}することができます。

図1の写真は、6月の早朝^{えだ}に枝の上でさえずっているところを撮りました。森の中でコルリの姿を見るには、早朝がチャンスなのかもしれません。

色鮮やかなオスと比べ^{くら}べ、メスの上面^{じょうめん}は青味^{あおみ}がかつた褐色^{かっしよく}で、下面^{かめん}は薄い褐色^{うす かつしよく}と、かなり地味な色をしており、メスのみが抱卵^{ほうらん}します。(図2)

さて、全国的に行^{はんしよく}った鳥類繁殖分布調査^{おんぶちようさ}によると、コルリが記録された調査^{ちようさ}コース数が過去^かと比べると減少^{げんしょう}していました。また、環境省^{かんきょうしょう}の調査結果^{ちようさ}では、シカに食べられて下層植生^{か そう}が減少^{げんしょう}してしまった調査^ち地^ちでは、コルリの個体数^{こたいすう}が減少^{げんしょう}していたそうです。

富山でも近年、シカの生息域^{せいそくいき}が拡大^{かくだい}しつつありま



図2 コルリのメス

す。シカの生息密度^{せいそくみつど}は、太平洋側^{たいへいやう}ほどではないので、まだその影響^{えいきよう}は感じられません。今後の変化^{へんげん}に注意^{ちゆうい}したいものです。いつまでも、コルリのさえずりがあちこちから聞こえる森であることを願っています。

とやまと自然 第47巻第4号(冬の号)(通算187号) 令和7年1月5日発行
発行所 富山市科学博物館 〒939-8084 富山市西中野町一丁目8-31
TEL 076-491-2123 FAX 076-421-5950

URL <https://www.tsm.toyama.toyama.jp/>

ホームページはカラー版で掲載

カラー版QRコード



発行責任者 浦田 純一 印刷所 株式会社グラフ TEL 076-438-4040